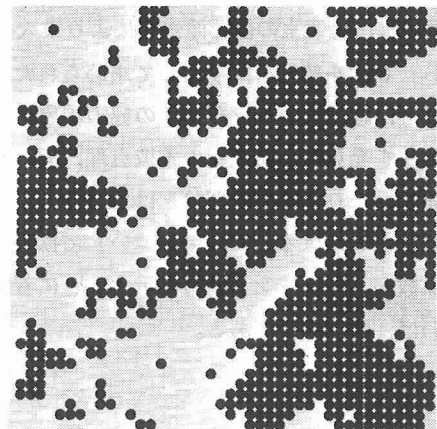
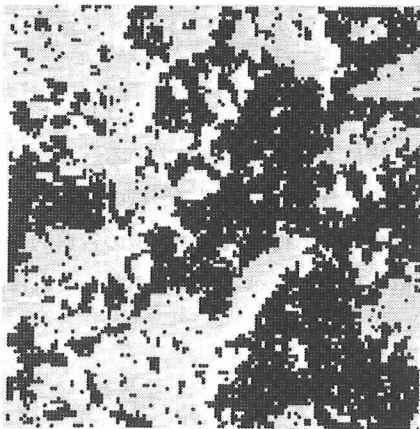
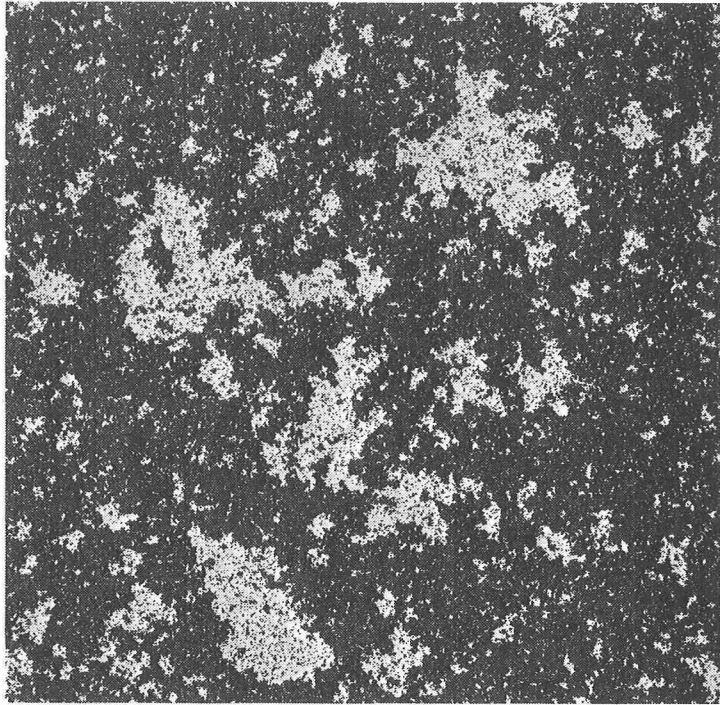


廣報

東京大学理学部



目

表紙の説明	1
進化論と古生物学	棚部 一成 2
判官	早野 龍五 2
坪井誠太郎先生の追憶	飯山 敏道 4
原寛先生を偲ぶ	大場 秀章 6

次

山内恭彦先生の追憶	宮沢 弘成 8
名誉教授との懇談会	10
総合資料館からのお知らせ	11
<学部消息>	11

表紙の説明

くり込み群の理論から 新しい平均場理論（CAM理論）へ

ノーベル物理学賞を受賞したウィルソンのくり込み群の理論を、コンピューターシミュレーションにより視覚化したものである。図（上）は 1024×1024 のイジング・スピン系を丁度臨界点（相転移点） T_c において、10000 モンテカルロステップで得られた配位を示したものである。+スピンは黒点、-は白点で表示した。隣接したスピン同志は互に同じ向きをとり易いような相互作用が働いている。丁度臨界点になると図のように、系全体に広がった（パーコレートした）クラスター（同じ向きのスピン集団）が現れ、その形はフラクタルな（片端な次元を持った）幾何学的構造を示すようになる。これをもっと正確に捉えるには、空間のスケール（尺度）を変えて粗視化し配位の変化を調べればよい。粗視化とは、スケール b の場合、 $b \times b$ のセル中にあるスピンの和が正ならば、そのセルに対応する粗視化されたスピンの向きを+にとり、和が負ならば、-にとることをいう。具体的に図（上）の一部分（ 128×128 ）に相当する配位（図下左）を $b=3$ でスケールした配位を図（下右）に示した。この粗視化により、スピンの総和 M がスケール b と共に $(1/b)^D$ に比例して変化するとしてフラクタル次元 D が定義される。図から、 $D=1.87$ と求められる。これは、2次元イジング・モデルの自発磁化 M_s の臨界指数 $\beta(M_s \sim (T_c - T)^\beta)$ によって定義される) が今の場合 $\beta=2-D$ をみたすことが知られているので、 $\beta=1/8$ であることと丁度対応している。このように、くり込み群の理論は、コンピューターシミュレーションと組み合わせて、いろいろな相転移の研究に応用されている。表紙の図は、研究室の伊藤伸泰君により東大の大型計算機センターのスーパーコンピューター S-810 を約10分間使用して求められたものである。

最近、臨界現象を含む一般の協力現象を研究する新しい一般的な方法——コヒーレント異常法を発見し、研究室の香取真理、胡曉両君と一緒に大いに発展させている。これは上に述べたくり込み群の理論とは異なり、平均場近似をクラスター近似（表紙の図ほど大きくなくとも、はるかに収束が速い）に拡張し、それによって得られる物理量の古典的発散の係数がコヒーレント異常を示すことに着目し、協力現象を調べる理論であり、これは、言わば、温故知新である。

物理 鈴木 増 雄

進化論と古生物学

棚 部 一 成 (地質学教室)

最近、生物進化に関する書籍を書店の棚でよく目にする。その内容も分子進化学から社会生物学、構造主義生物学といった様々な立場から書かれていて、この問題に関する社会的関心の深さの一端をうかがわせる。

私の専門である古生物学も、生物進化の道筋や仕組みを探ろうとする分野の一つで、主として化石を研究対象としている。恐龍や三葉虫、アンモナイトの化石の名前を耳にしても、それらが具体的にどのような古生物であり、どのように生活し進化していったかを知っている人は案外少ないであろう。このような問題を明らかにするために私達は積極的に生物学の理論やテクニックを導入するとともに、必要に応じて化石生物に近縁な現生生物そのものを研究対象とする場合もある。したがって、たとえ実験的に再現できなくても、得られた古生物学的結論は決して想像の産物ではなく、科学的に十分根拠のあるものなのである。

私自身は、ここ10年、化石頭足類(軟体動物)の一群であるアンモナイト類の生活史と機能形態の研究に取り組んできた。これらは絶滅種であるため、体制や生態の復元に際しては、どうしても現生種の生態や比較解剖の知識が必要になる。

そのため、並行して現生オウムガイやイカ類を素材に比較研究をしてきた。今年の6月には、米国のフィラデルフィアで現生オウムガイ類に関するシンポジウムに参加する機会を得て、多くの海洋生物学者や動物学者と交流を深めることができた。この問題に限らず、欧米の生物学者には古生物学に関心ある人が多く、論文を書くとかかなりの問い合わせや別刷の要求がある。日本の大学では古生物の研究者は地質学や地球科学系の教室に所属し、生物系の教室には数えるほどしかない。そのせいか、せっかく共通の研究テーマを持っていても、生物学者と古生物学者の間の交流は極めて少ないのが実状である。近年、古生物学の立場から断続平衡モデル(提唱者の一人であるハーバード大学教授のS. J. Gould 博士は「ダーウィン以来」や「バンドの親指」といった優れた進化論エッセーでも知られている)のような重要な進化学説が提唱されたり、原核生物や真核生物の起源についても多くの真事実が出ている現実を考えると、我々ももっと古生物学の重要性を国内外にアピールして、境界領域や自然史学の発展に努力したいと考えている。

判 官

早 野 龍 五 (物理学教室)

「判官」に読み仮名をつけよ、という問題になんとお答えになりますか。「ハンガン」か、それとも「ホウガン」か、などと急に聞かれると、さぞどちらだろうと考え込んでしまいますが、実はどちらでも良いらしい。国語辞典を見ると、両方

共に正解のように書いてあります。それでは、「判官びいき」はどうか。机上の国語辞典では、「は」の項にも「ほ」の項にもこの言葉が載っています。ちなみに、私が使っているワープロの辞書には「ハンガン」の読みは登録されていましたが「ホ

ウガン」は入っていませんでした。近ごろどうやら「ほうがん殿」は羽振りが悪いらしい。

判官と言うのは昔の官職名ですから、特定の個人を指す意味は本来無いはずなのですが、芝居の世界で「ほうがん殿」と言えば、これはユニークに源九郎判官義経を指す言葉となります。義経の世界を描いた作品は多く、義経千本桜、勸進帳など、いまでもしばしば上演されているのは御存じの通り。本物の義経は背が低く、それほど男前ではなかったそうですが、劇中の御大将は愁いを含んだ貴公子です。この悲劇の武将に肩入れする心情が即ち「判官びいき」という訳なのですから、やはり「ハウガンビイキ」と読むのが妥当なのでしょう。

一方、「ハンガン」と読んだらば、忠臣蔵。多くの家臣があることも省みず殿中で刀を抜いてしまった短慮な殿様、塩冶判官「エンヤハンガン」（実録では浅野内匠頭）が思い浮かびます。赤穂浪士に取材した芝居は、最近のテレビドラマや映画に至るまで数多くありますが、中でも忠臣蔵は二百数十年来演じ続けられ多くの名優が工夫を重ねてきただけあって現代でも鑑賞に堪える名作だと思います。

ハンガンとハウガン。判官という字に関連する二人の話が、どちらも歌舞伎を代表する演目となっており、また、古来日本の心情をあらわすものとして論じられてきたのは偶然とはいえ面白い事です。

閑話休題。最近、外国の研究者仲間に手紙を送るのに電子メールを使う機会が多くなっています。これは使い始めると大変に便利なもので、まず第一に早い。今日出した手紙の返事はだいたい翌朝にはもらえます。実験データや論文の原稿なども、コンピュータのファイルをそのまま相手に送ることが出来るし、受け取った側でも再度タイプ入力する手間なしにデータを解析したり原稿を直したり出来る。国際会議のプログラムをどうするか相談したり、会議の出席登録を集めたり、コントリビューションを集めたりするのに電子メールを活

用する例もありますし、国際会議場で電子メールのアドレスを教え合う風景も多く見られるようになってきました。

電子メールの文化は若い世代のものかと言うとそんなことはないようで、コンピュータは使わないけれど電子メールのためにはキーボードにさわると言う老教授も結構おられる由。先日もヨーロッパ出発を控えて慌ただしい某教授に届いた電子メールを肩ごしに一瞥するなれば、仕事の手紙にあらずして、オペラ見物の日程の相談。そして、相手側からは来月の歌舞伎のプログラムの問い合わせ。電子メール文化が着実に育ちつつある一面を見た思いがしました

外国からお客様があるとしばしば歌舞伎に案内しますが、最初になにを観るかによってその人が歌舞伎を好きになるかどうかが大きく左右されます。平均的に言って、筋も構成もきちんとしていて現代劇に近い感覚で観られるものの方が違和感が無いようで、これははじめて歌舞伎を観る日本人にも当てはまるようです。

今年のはたまたま国立劇場開場20周年にあたり、その記念行事として10, 11, 12と3カ月に亘って忠臣蔵が上演されます。忠臣蔵は初めて観ても十分に楽しめ、繰り返し観ても新しい発見のある芝居です。芝居が好きだと言うだけで特にまとまった講義ノートの用意があるわけではないのですが、ちょうど良い機会なので、駒場の全学ゼミで忠臣蔵を教材にして歌舞伎の入門講座を開こうと思いいちました。

忠臣蔵の芝居には、殿様が大事件を引き起こしていると言うのに持ち場を離れ、腰元とデートをしていた不心得者の若い侍が出てきます。その名は早野勘平。勘平は劇の半ばにして、討入に参加すること無く無駄な死に方をしてしまう悲劇の主人公ですが、一方、忠臣蔵の登場人物の中で一番の男前であるということ（になっている）でも有名です。

早野という姓はあまり多くある苗字ではないので、たまたま私と同姓のこの劇中の人物には、昔

から親近感を抱いてきました。今でこそ歌舞伎は芸術と言われ国の保護を受けていますが、昔は悪所だったことは御存じのとおり。物理の教官がと

んでもないものを教えたいと言い出したがために各方面の方々に迷惑をおかけしましたこと、勘平さんに免じてお許しあれと云爾。

坪井誠太郎先生の追憶

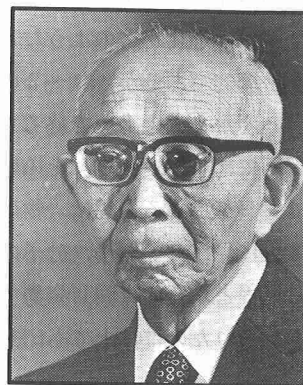
飯山敏道（地質学教授）

昭和61年9月22日、本学名誉教授坪井誠太郎先生がおなくなりになった。この報に接して、一時自分の耳を疑ってしまったのは私のみではないと思う。93歳の御高齢とはいえ、ついこの間まで坪井先生らしい端正なお姿と足どりで、時々教室に来ておられた。その折には何時も歯切れのいい口調で、明せきな御考察の数々をお話し下さった。何時しか、私共の頭には“不死鳥の坪井先生”というイメージが形成されていたのである。

先生の数々の御業績と御貢献については、東京大学広報で報じられている。こゝでは、御在官当時の先生と学生達という角度から先生を画きだし、先生を偲ぶこととする。

昭和23年、私達17人は理学部地質学科に入学した。“坪井先生は気難しく、厳格な方だぞ”と誰からともなく教えられた。それなりに覚悟して、必修の岩石学の講義に出る。たしかに、講義室にぬれた傘を持ちこんで、床に水が拡ったりすると、ひどく叱られるという、先生の気難しさはあった。しかし、講義には、当時、ラジオの人気番組の“話の泉”の話も出てくれば、外国の大学街の様子や有名な学者のエピソードも語られる。結構息抜きのできる科目であった。それにもまして、講義が明解で、お話を聞き乍ら、こっちが考える余裕が充分にあるものであったことが嬉しかった。数式が出て来て閉口だと言う者もあったが、それも覚える数式ではなく、理解するための数式であり、楽しいものであった。

先生は“岩石学、鉱物学は観察から出発する学問である。岩石の産状の観察の次には、標本を鏡下で観察することになる。この検鏡という基本手



段を十分に教えよう。それに続いて造岩鉱物の主なものの性質、特に物理化学的な性質について話せば充分である。岩石に関する研究基礎を与えることに徹底しよう”と考えておられたようである。一年間続く講義と実習の前半は結晶光学であった。それも、結晶物質の光学的性質が偏光顕微鏡下でどのように現われるかについて焦点がしばられていた。演習は結晶光学の面倒な計算を対数表と鉛筆でやらねばならず、非常に閉口した。しかし、そのお陰で、検鏡している時に、今この鉱物の結晶をどの方向からどのような性質について見ているかと言うことについての認識が常に頭の中にあるようになったのも事実である。第二学期は、主要造岩鉱物の各論と実習であった。造岩鉱物に関する教育は、坪井先生が、東大の岩石学をして、“最も東大らしい岩石学”に育てられた源泉であった。しかし、決して多くの鉱物について多くの事実を羅列されるのではなく、ごく限られた鉱物について物理化学的性質を中心に話されるものであった。造岩鉱物にこれだけの努力が注がれている大学は、世界でも数少く、恐らく英国のケンブ

リッジ大学とその系列と東大だけであろう。二大
学とも、岩石学では、多大の貢献をした研究者を
輩出している。岩石学と名づけられた先生の講義
で実際の岩石についての話があったのは、わずか
3回だけであったが、それで充分研究遂行の基礎
が与えられていた。

中期生になると、選択科目で、岩漿論および変
成論という講義が坪井先生によって行はれていた。
これも、多くの複雑なことを話されるものではなく、
岩石、マグマの進化をどのような角度から考
究すれば最も合理的であるか、2～3の例を丁寧
に説明され、わずか8回の講義で終るものであ
った。“地下深所で起った変化を、その産物である
岩石を調べて考察を進める過程は、物理現象、化
学現象を見て目に見えない原子、分子の構造や性
質を推定する過程と本質的に同じ姿勢である。”と
講義をしめくくられたのは、とても印象的であ
った。

先生は“変化を目で追うことができない岩石の
成因の研究では、観察事実の解釈の論理にあいま
いさがあるてはならない”と常に思われ、御自分
の行動、発言もこの信条に従っておられた。

終戦後間もない頃の大学に対する占領軍の干渉
も少なくなかった当時である。血気盛りの我々は、
やゝもすると、学生ストライキだ、学生大会だと
騒ごうとした。私達はこの騒ぎで忙しいから、試
験を延期して頂くことを考えた。この申し出をし
に、総勢15人が、アポイントメントもとらず、夕
方お宅に押しかけた。我々を招じいれられた先生
は皆の話をきかれた後、“今回の占領軍の干渉は
私達教官も心配して、大学の自由を守るための対
応策を考えている。かと言って騒動を起して解決
されるものではない。まだ最終行動に出る時では
ない。そもそも、こう言う最後手段に訴える時
には、一命を賭す決意が必要だ。そこまでは切迫
していない。とに角試験は予定通りやりましょ
うと10時すぎまで押し問答、結局私達は試験を受け
る約束をした。先生の方に道理があり、冷静に話
される先生のかもし出される直剣な雰囲気一同

強い感銘を受けて帰途についたのであった。

中期の夏の地質調査実習のフィールドで私達が
起した悶着も忘れられない。地質学科では中期生
の時40日間、3～4人の班にクラスが分れ、1/
50,000地形図の1/4位の地域を調査する。私達
の時の実習は坪井先生が指導された。発表された
フィールドは、長野県の鹿塩村から北は茅野の南
にわたる地域であった。分布する岩石はどの班も、
変成岩と花崗岩が主で、堆積岩の分布は極めて少
い。勇気？のある奴が先生に“地質調査の実習地
としては不適當である”と申し出た。どんなに立
腹されるかと思ったのだが拍子抜けがした。先生
のお答えは、“私は地質調査実習の担当の度毎に
中央構造線沿いに九州から始めて、この構造線の
北端まで来ました。私の最後の指導担当だから、
こゝにします。どんな岩石が分布していようと
も、地質調査の勉強はできます”と言われ、返す言葉
もなく、このフィールドを調査することに同意し
たのであった。先生は一班に2日位来られ、私達
と一緒に歩いて下さった。先生が来られる前には
無味乾燥、あまり気のりのしないフィールドであ
ったが、先生が私達の班に下さった問題とそれ
に対するヒントのお陰でその後の炎天下の調査が楽
しいものとなったものなつかしい記憶である。

私達のクラスには急進派も多く、先生に種々非
常識なことも言ったが、何時の間にか“先生は気
難しい方だが、理屈が通り、こっちに誠意があ
れば解って頂ける”ということが皆の心に芽生えて
いた。又“ひどく叱られることはあっても、後々
までそのことのたたりを受けることはない”と言
うことも解って来た。その証拠には、後期の卒業
研究で、先生の指導下に入ることを決めた5人
の中に、騒ぎの度に首謀者となる急進派の2人が
いたことでも肯げよう。

先生が岩石学を専攻する教官、学生に御自分の
研究結果なり、文献で読まれた事なり、学問の紹
介をされる時、先生はそのことが非常に楽しくて
たまらないと言う気持を満面にたたえられる。“学
問をすることは、楽しいことなのだ。たとえ肉

的な苦痛を伴っても、新しいことを知ることは楽しい。学問がそういう姿になるためには、自由であることが肝要だ”と口ぐせのように言われる。“自由であるためには、慣習的に言われ、皆が真理と思っていることにとらわれてはならない。”と言う訳で、一弁したことから議論が始り、4時に始ったゼミが9時になっても終りそうもなくなるのが時々あった。数学や物理学とは異り、常に黒か白か判定がつかない場合に対して、ある規範を設けて、他方を消去し、一方をとる態度に対する坪井先生の抵抗はそれ程強烈であった。

坪井先生の下に暮すこと4年で、先生は御退官になり、私も東大を出てやがて渡欧した。その新しい環境での生活の最初の日から、異和感を感じることなく、19年の歳月を研究で過ごすことができたのは、欧州の研究者社会の根底に、坪井先生が日常言っておられた事が綿々と流れていることによるような気がしてならない。先生が欧米に滞在され、いくつかの有名な研究を発表されたのは、わずか3年という短期間であった。その間に、このような信念を持つようになられたことは考えられない。それとも、大正末期の欧州の科学者達は、

坪井先生に感化を与える程、強固で明解な哲学の持ち主であったのだろうか。私には、先生が渡航される前から強く考えておられ、たまさか、先生が行かれた英国の学問社会の雰囲気、先生のお考えと一致していて、意を強くして帰国されたように思えてならない。

晩年の先生は、この信条が更に大らかに発揚され、種々なことに興味を持たれ、鋭く考えられては、私共の所へ来ては話して下さった。

東大理学部地質学科を卒業した人達が、日本だけではなく世界の学界、産業界に残した貢献は大きい。これらの人々の仕事が、岩石学であれ、他の地質学分野のもとであれ、多かれ、少かれ、坪井的なものを認めて、先生の影響力の大きかったことを改めて感ずる。それが時には、論理の綿密な整合性であり、時には、建前と言うことをぬきにした本音に基く行動であることもある。

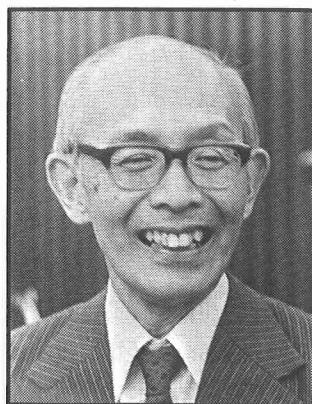
私達は、先生の崇高な人格と、すぐれた学問とその理念の影響を受けた幸福に感謝する。またこのよい影響に培われた地質学教室の伝統が今後も引きつがれて、一層多くの実りを結ぶようにも希って止まない。

原 寛 先 生 を 偲 ぶ

大 場 秀 章 （総合研究資料館）

名誉教授原寛先生は本年（61年）9月24日午後6時21分心不全のため東京目黒の自宅で急逝された。75歳であった。ここに謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

先生は、明治44年1月5日東京に生まれ、昭和9年3月東京帝国大学理学部植物学科を卒業し、直ちに理学部副手、13年講師になり、同年8月より16年まで在職のまゝ文部省在外研究員としてハーバード大学に留学、19年助教授、32年同教授として植物学第一講座を担当され、植物分類学・植物地理学を講ぜられ、46年定年退官された。



その間、学内においては総合研究資料館の設立に尽力され、同館館長(43—45年)、また、45—46年は理学部附属植物園長を併任された。国際的には、国際植物分類学会評議委員(34—61年)、国際種子植物命名規約委員会議長(50—55年)などを務められ、国内では、日本学術会議会員(41—43年)、日本植物学会会長(44—49, 54—55年)、日本植物分類学会会長(46—49年)などを歴任され、植物学の発展と国際交流に大きな功績を残された。

幼少の頃から先生は植物が好きで、植物学、特に分類学、を志し、はやくからそのための準備をされていた。本学入学直前に出版された『学習院構内植物目録』—いまでは東京市中にかつて生育していた植物の貴重な記録になっている—などからもこのことを読み取ることができる。先生は温帯の植物に特に強い興味を感じておられた。その頃朝鮮半島の植物を研究されていた恩師中井猛之進教授が先生の卒業論文に勧めた能登の植物研究をわざわざ断わって、温帯植物の宝庫である北海道日高地方の植物研究を申し出たほどである。

日本の温帯にはヨーロッパと北米に共通する植物が多くある。当時は欧米の学者がその研究をリードしており、その成果を吸収するだけでもたいへんであった。しかし、先生は鋭い洞察力に加え、わが国ではじめて細胞分類学の手法を導入し、日本の温帯植物が有する高い多様性を明らかにし、「ヨーロッパと北アメリカに類縁種がある日本の植物の変異」をはじめとする多くの論文を発表し国際的に高い評価を受けたのである。また、先生は、「ネコノメソウ属の分類」をはじめとする学名の厳密な検討の上に立つ種族誌的研究を発表されたが、これらはのちの研究者の範となっている。

温帯植物の研究を通して先生は欧米の分類学者と共通の話題をもつことができた。これは米国留学とともにのちの先生の国際的な活躍を支える素地となったのである。先生は、永年にわたり国際学会で活躍された。特に、昭和34年からは国際植物分類学会評議員を務め、国際植物命名規約等

の重要事項を審議された。また先生は、ロンドン・リンネ協会外国会員、エディンバラ植物学会名誉外国会員、トーレイ植物学会名誉終身会員などに推挙された。

先生は不朽の名著「日本種子植物集覧」全3巻(岩波書店)ほか総計350篇におよぶ論文・著書などを著わした。文字通り研究と調査のために明け暮れる日々を過ごされたのである。先生には取りつくしまもないといわれた方がいる。在職中は特にそういう言葉を耳にした。

ところで、先生がはにかみやで人見知りをするといったら驚かれる方も多いのではないだろうか。はじめての客人と接する時は特にそうで、沈黙の時を少しでも減らそうと周囲のものが苦勞したことが再三あった。また、講演は無論ちょっとした即興風のスピーチでさえ事前にメモを準備されていたことも意外に思われるであろう。

先生が並はずれた国際感覚をもっていらしたことは大方の認めるところである。このような感覚は生来のものであるが、米国留学によって一層の洗練を受けたように思われる。先生は、留学先で接したニューイングランドの人々の質素で無駄がなく合理的なうえ規則や約束は厳重に守る生活ぶりに心動かされたと書いている。これは先生自身の生活信条でもあった。

先生はどんな教育観を抱かれていたのだろうか。かつて先生は「私の経験から見れば大学では新しい知識を知るといふ以上に、学問に対する態度、エチケットから細かいことでは、論文の書き方に至るまで色々なことを身につけるのが大切であると思う」とおっしゃったことがある。

また、恩師中井先生が内外の資料文献を縦横に引用しながら、鋭い観察力で新しい意見をだされる精力的な仕事ぶりに心をひかれたと述懐もなされている。先生は、このような考え方を教育の基本とし自らがその範たるよう努めた。特に先生は、学生からの質問とそれに答える方式を尊重した。先生の教育観は古き良き時代を代表するものなのであろう。

温帯植物の研究から先生の研究は日本植物の起源や植物相の形成過程を探る方向へと向かった。この研究には、日本の植物をアジア大陸や、北米東部に生育している近縁の植物と十分比較研究することが必要であり、先生はこれを実施する機会を俟った。

昭和35年に至ってようやくヒマラヤ調査のきっかけをつかむことができたのである。今日の海外学術調査のはしりになるもので、実施にあたっての困難は言語に絶するものであったらしい。特にこの最初のヒマラヤ調査に入ったシッキム—当時は独立国であった—の入国にインドの許可が必要で、これが取れず難航した。先生は他の隊員を国境のシンガリラ山脈に先に出発させ独りで交渉にあたった。まさに背水の陣である。

感情をあらわにすることの少ない先生も、この時のことを「(シッキム入国)ぎりぎりに許可書が届き、私はジープを雇って山稜をとばした。…夕方、シンガラ山脈の海拔3,600 mの峰の上から登ってくる隊員に、『おーい、許可書がとれたぞ』と手を振りながら叫んだ時の感激は、今も忘れない。」と書いている。こうしたヒマラヤでの調査研究の成果は、大英博物館から出版された「ネパ

ール産種子植物総覧」全3巻などの論文・著書に結晶し世界の注目を浴びた。さらに、昭和55年からは高齢にもかかわらず中国奥地の植物調査に先生は三たびも出かけられたのである。

上記の引用はすべて、信濃毎日新聞に昭和58年5月から6月にかけて連載された回想記からであるが、先生はこれを次のように締めくくられた。「日本植物を研究するための比較資料を求めて、北米東部、ヒマラヤ、バイカル、中国を歩いたのだが、国際情勢もからみ一応これを見るのに50年の歳月が流れてしまった感じである。本当はこれからこれまでの経験と資料を生かして日本の植物をさらに深く研究するのが、私の初めからのそして最後の目的であった。植物の世界にはまだ分からないことがたくさん残されている。今後もしもできる限り日本の植物研究に余生を捧げたいと思っている。」

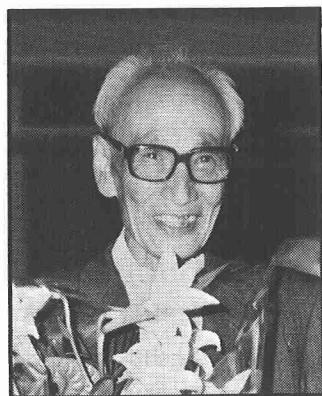
お亡くなりになる前日、私はウプサラ大学のH教授を案内して先生を自宅にお訪ねした。いま投稿を終えた論文のことをはじめ、今後のヒマラヤや東アジアの植物研究の進め方などを巡って話が尽きなかった。先生にはこれからやりたい研究が山のように残っていた。誠に惜しい限りである。

山内恭彦先生の追憶

宮 沢 弘 成 (物理学教室)

山内恭彦先生は二年ほど前から御静養中であったが、10月13日永眠された。先生が東大工学部から理学部へおいでになったのは昭和24年4月、先生が46歳の時であった。当時学生だった私達は早速弟子入りさせていただいたのだが、先生は原子核理論をはじめ、当時盛になりつつあった素粒子理論の研究グループを指導されることになった。講義は厳格で、いわゆるこわい先生だったようである。

先生はそれから理学部長、物理学会の会長等に



就任された。が、まわりの人をおだてて仕事をさせるという方針だったそうである。御自分でなせることはあまり好きではなかったようで、その後は長とか員とかつく役にはあまり関係なされなかった。

先生の学問的業績は理論物理学の広範囲にわたるが、とくに原子・原子核などの多体系に群論を応用することが主題であった。量子力学に回転群・対称群の表現論を応用するという当時の大流行、いわゆる（第1次）群疫（Gruppenpest）に主要な役割をされた。対称群での山内の記号は広く知られている。これらの業績に対し学士院賞が授与された。先生によるとそのアイデアは自動車と接触事故を起こしたときひらめいたのだそうである。先生はまた、古典的名著「一般力学」をはじめ多くの著書をのこされた。これで勉強した学徒は多いことであろう。

先生は江戸の与力を先祖とする江戸っ子であった。はぎれのよい淡々とした態度、漂々とした風格は、そのまま先生の学問に対する姿勢でもあった。ずばりとしたところは、物理学の放棄の原理、切断の精神につながるのである。弟子、学生は有形、無形の薫陶により、これらのものを伝統として引き継いでいくことになる。

学生にとってはこわい先生であったが、研究室の私達には良いおやじであった。何をいっても笑って許して下さった。お酒が好きですぐ御気嫌になり、陽気に騒いだものである。酒を飲むと数学ができる、あるいは数学をやるには酒が必要というのが先生の原理であった。私は不肖の弟子で飲み方を会得できなかったが、先生方の酒盛りに付き合うのは楽しいことであった。先生は山歩きをよくされた。若い頃は小谷正雄先生とよく旅をされたそうである。身長も出身地も性格も異なるお二人は絶妙のコンビだったのだろう。理学部教授になられてからも私達若い連中を、日光など方々に連れて行って下さった。お蔭で、私達（たとえば猪木さん）は今若いのと山歩きしてもおくれをとらない。また先生は山の写真を多く撮られた。白

馬をはじめ山の綺麗なカラー写真を見せていただくことができる。

私的なことであるが、山内先生のお名前を知るのにこんなことがあった。東大物理に入学したばかりの頃、日高孝次先生にお目にかかる機会があった。いろいろ御注意のうちつぎのことをいわれた。「学問をするのに、米飯は胃に負担がかかって良くない、パンにすべきである。私の同級生に山内という偉いのがいるが、米を食べているのであそこまでしか偉くならない」。私は感心してきいたのだが、後日このことを山内先生に伝えると、「なに、日高がパンを食べている？そのわりには偉くならないなあ」とのことであった。私はお二人が良きライバルであることを知り、食物とか酒とかは学問と関係なさそうだと感じたのである。

床につかれてからは時々、自分が死んだときということをお口にされたが、まだ先のことだといって大半は聞き逃した。唐の詩人某ということをおいわれた。その詩を葬儀のとき朗読せよということと思い、中国の詩に詳しい有馬さんと調査することにしてまだ実行しなかった。また参列者に酒かビールの小瓶をともしわられた。帰りに配れという意味か、それ以上のことか。告別式のとき一同で乾杯してお酒の好きだった先生を送ることができないかとも考えたのだが、これも準備できなかった。

最後にお目にかかったのは9月中旬で、落ち着いた御容態であった。「これから2ヶ月パリへ行てきます。アルプスの写真をとってくるから見て下さい」というと大きくなずかれた。ところがその写真をとっている頃、先生は逝ってしまわれた。連絡がつかず御葬儀も知らないでいた不孝者になってしまったが、先生は「元気でやっているわい」と笑って許して下さると思うのである。

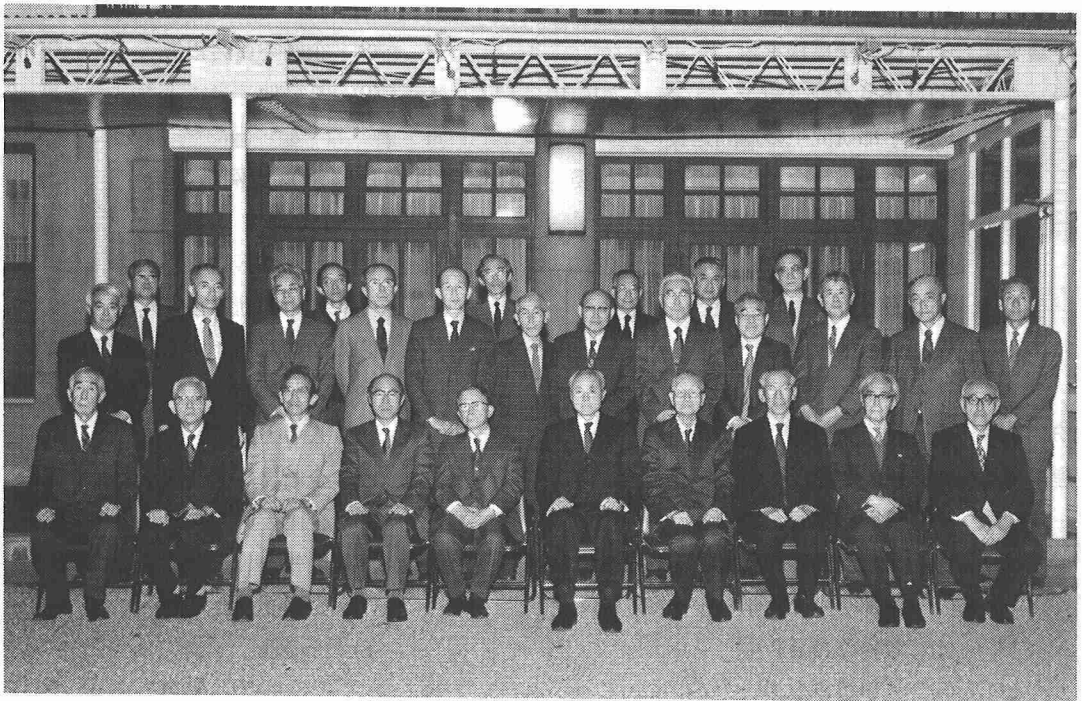
名誉教授との懇談会

去る11月7日(金)午後5時から、赤門脇の学士会分館において、理学部恒例行事になっている名誉教授との懇談会が森総長ご臨席のもとで開催された。

懇談会には、理学部関係名誉教授64名のうち22名の先生がご出席され、学部から有馬学部長はじめ朽津、飯山評議員等の関係者が出席した。

懇談会は、戸張事務長の開会に始まり、有馬学部長から挨拶と近況報告があり、ついで森総長の挨拶のあと、記念撮影を行い、最長老の木村健二郎先生の音頭による乾杯で懇談に入った。懇談は各先生方のご活躍の様子やユーモラスな近況報告などがあり、始終なごやかな雰囲気包まれた。

また、生物化学科宮沢辰雄教授による「バイオモレキュラーサイエンス」と題する講演がスライドを使って行われ、先端技術に対する関心と期待が寄せられた。



東京大学総合研究資料館主催 第33回講演会のお知らせ

このたび総合研究資料館では、下記により講演会を開催致します。聴講ご希望の方は、直接会場へおいでくださるようご案内します。

記

総合研究資料館主催第33回講演会

講演者 能勢幸雄総合研究資料館長
(農学部教授)

演題 「アイスランド—その自然・人

・漁業」

日時 昭和62年2月28日(土)
午後1時30分～

入場 無料

場所 総合研究資料館講義室
(赤門入る右折歩60メートル)

☎ 03(812)2111 内線2802

《学部消息》

教授会メモ

61年9月10日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 学部研究生の期間延長について
(4) 企画委員会大学院構想検討小委員会報告
(5) 企画委員会建物小委員会報告
(6) 教務委員会報告
(7) その他

- (6) 会計委員会報告
(7) 企画委員会建物小委員会報告
(8) 企画委員会報告
(9) その他

61年11月19日(水) 定例教授会

理学部4号館1350号室

- 議題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 昭和62年度文部省内地研究員の受入れについて
(4) 人事委員会報告
(5) 企画委員会建物小委員会報告
(6) 企画委員会大学院構想検討小委員会報告
(7) 企画委員会報告
(8) その他

61年10月15日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 学部学生の休学について
(4) 教務委員会報告
(5) 人事委員会報告

人 事 異 動

(講師以上)

所属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
中間子 客員部門	助 教 授	今 里 純	61. 9. 1	併 任	本務：高エネ研助教授 62. 3. 31まで
地 質	助 教 授	棚 部 一 成	61. 10. 1	配 置 換	愛媛大理学部助教授から
地 殻	教 授	脇 田 宏	61. 10. 1	昇 任	助教授から
天 文	教 授	内 田 豊	61. 11. 1	併 任	東京天文台教授

(助 手)

中間子	助 手	松 崎 禎市郎	61. 7. 31	辞 職	理化学研究所へ
物 理	〃	大 橋 隆 哉	61. 8. 1	採 用	
地 物	〃	兼 岡 一 郎	〃	昇 任	地震研助教授へ
数 学	〃	大阿久 俊 則	61. 8. 31	辞 職	横浜市大助教授へ
数 学	〃	久 我 健 一	61. 9. 1	採 用	
物 理	〃	曾 田 邦 嗣	〃	昇 任	長岡技大助教授へ
動 物	〃	三 谷 啓 志	〃	転 任	京大助手から
中間子	〃	三 宅 康 博	61. 10. 1	採 用	
地 物	〃	比 屋 根 肇	〃	〃	
数 学	〃	水 町 龍 一	〃	転 任	東北大理学部助手から
化 学	〃	藤 原 祺 多 夫	61. 10. 16	昇 任	広島大学助教授へ
物 理	〃	腰 原 伸 也	〃	採 用	
植 物	〃	大 矢 禎 一	〃	〃	
地 理	〃	久 保 幸 夫	61. 11. 1	昇 任	お茶の水女子大学講師へ
物 理	〃	城 所 俊 一	61. 11. 16	採 用	

(職 員)

物 理	事 務 官	高 木 葉 子	61. 11. 16	辞 職	
-----	-------	---------	------------	-----	--

外 国 人 客 員 研 究 員

所属	受け入れ教官	国 籍	氏 名	現 職	研究員期間	備 考
物 理	矢崎 教授	日 本	岡 真	ペンシルバニア 大学助教授	61. 7. 20 ~ 61. 8. 31	

理学博士の学位取得者

〔昭和61年9月26日付（8名）〕

専門課程	氏名	論文題目
論文博士	佐藤 康太郎	壁電流による新しいビーム位置検出器
論文博士	石崎 廣	中緯度大循環モデルを用いた中規模渦と平均流の相互作用の力学の研究
論文博士	横谷 馨	高エネルギー電子貯蔵リングにおけるビームの偏極
論文博士	佐々木 敏由紀	横向き湾曲銀河 NGC 5907 の表面測光
論文博士	秋道 智弥	バプア低地・ギデラ族の小児の発育におよぼす環境要因の生態学的研究
物理学	田崎 晴明	統計物理学・場の理論における確率幾何の方法
〔田崎晴明氏の論文は修業年限の特例による特別審査〕		
論文博士	深町 博史	哺乳類の消化管の分化における結合組織の役割
論文博士	久保 良雄	地球回転におけるコアとマントルの相互作用

〔昭和61年10月27日付（1名）〕

論文博士	山田 雅弘	網膜神経細胞における視覚情報処理に関する研究
------	-------	------------------------

海外渡航者

（6ヶ月以上）

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
動物	助手	武田 洋幸	連合王国	61.9.1～ 62.3.31	発生生物学に関する研究のため
素粒子	助教授	武田 広	スイス	61.9.11～ 62.10.31	国際協同実験電子・陽電子衝突実験のため
物理	助教授	江口 徹	フランス	61.10.1～ 62.3.31	フランス、パリの高等師範学校（エコールノルマル）で理論物理学の研究を行うため

理学部長と理職の交渉

理学部長と理職の交渉はこの間昭和61年9月22日、10月20日におこなわれた。主な内容は以下のとおりである。

1. 専門行政職俸給表適用問題について

標記の件については、昨年来、学部長と理職の間で交渉や議論がすすめられてきたが、理職の要望にそった解決は困難な情勢にあることが既に学部長より報告されていた（「理学部広報」18巻2号、11ページ）。こうした状況をふまえて理職は「専行職俸給表適用に関する『文部省第2次案』と決別し、真の大学技術業務の発展、技術系職員の地位向上・待遇改善のための制度改革を」という見解を9月24日発表し、学部長に理解を求めた。

学部長は、理職の見解に理解を示しつつ、「この問題は、あくまで大学の教育・研究を進展させるという見地で議論している。大学の大きな使命達成の中で待遇改善にもとりくむつもりである」と述べた。

2. 大学の改組・再編問題について

理職は、天文台改組問題をふくめて東大における改組・再編の動向を尋ねた。これに対し、学部長は「『研究は研究所で、教育は大学で』という考え方が根本にあるように思われる。かつその考え方が科学技術行政に反映しているのではないかと心配している。天文台改組のための調査費が62年度概算要求として計上することが先の評議会で了承されたが、この懇談会その他で東大の研究・教育を阻害しないことが改組を最終的に承認する条件であることが確認されている。」と述べた。

また、理職は、9月30日の東大教官懇話会で提出された「学院構想」について説明を求めた。学部長は「この構想は全く私案である。理学部としては、理学部の現状、未来に危機感をいだいており、この構想をふくめ、学部・大学院教育について企画委員会、特に大学院構想検討小委員会で検討しつづけている」と答えた。

3. 行(二)問題

理職は、行(二)技術系職員の専門職移行が困難な情勢であること、行(二)から行(一)への振替が年々困難になっていること、行(二)労務系職員の待遇改善や昇格が著しく遅れていることに鑑み、「行(二)職員の待遇抜本改善のための懇談会」を設置するよう提案した。理学部長は、この提案に賛意を示し、具体化の検討を約した。

4. 技術系職員の科研費分担者問題について

理職は、「技術系職員の科研費申請が奨励Bに限定されているのはおかしい。少なくとも技術開発や機械の試作をめざす試験研究の分担者として技術系職員を認めるべきではないか」と主張した。理学部長は、「今のところ無理なようである。将来の問題として関係機関に働きかけるが実現までには時間がかかるだろう」と答えた。

5. その他

昇格、定員化、行(二)職員の行(一)振替、教務職員の助手振替勤務延長・再任用などが、継続して議論された。

編集後記

今月は棚部，早野両先生から興味深いエッセーをいただきました。しかし，悲しい事に巻尾にこの秋亡くなられた坪井誠太郎先生，山内恭彦先生，原寛先生，お三方もの名誉教授の追悼文を掲げる事になり，また続いて平川浩正教授の訃報を聞きました。謹んで哀悼の意を表します。

興味ある表紙のグラフィックをいただいた鈴木増雄先生が仁科賞を，地球物理の小嶋稔先生が三宅賞を受賞されました。紙面をかりてお祝い申し上げます。

(佐佐木)

編集：

佐佐木 行 美 (化学)	内線	4359
佐 藤 勝 彦 (物理)		4207
松 野 太 郎 (地物)		4294
高 橋 正 征 (植物)		4474
田賀井 篤 平 (鉱物)		4544